

膵の語源について (3)*

土屋 涼 一¹⁾

I. 大槻玄沢『重訂解体新書』名義解膵篇 第二十二の注釈と訂正

胆と膵 23 卷 5 号 2002 年の 411 頁に大槻玄沢の『重訂解体新書』名義解膵篇第二十二を紹介したが、その記載内容について誤りと思われる箇所があり、前回と同様まず図 1 と図 2 に名義解膵篇第二十二の全文を示し、さらにここに全文を平仮名混じりの文章に直して記述する。そして問題の所を取り出し注釈を加え説明することにする (図 1, 2)。

「膵篇第二十二

膵は新訳なり、パンクレアスは羅 (註：ラテン語) なり。アルフレエス、キリール・ベッテは並んで蘭 (註：オランダ語) なり。按ずるに和蘭の二つの名は共に二語を連合し之を称するものなり。アルは都 (註：すべて) なり、統 (註：すぶ、すべて) なり。フレエスは肉なり。肉とは即ち濾胞を指すなり。(濾胞の聚結するものも亦肉と稱す。其の義前に見る)。此の濾胞が統会して一片の肉を為すの義なり。其の一 (註：もう一つの名) は即ち濾胞牀の義なり。蓋し濾胞会萃して一物となり横に胃の下に居て自ら牀となる因ってもって名づく。(此れなお漢が石液の鐘聚し磐結する者を以て鐘乳牀と名づくが猶き歟)。夫れ此の物は酸液を藏めて胆の苦汁と相須つて用を為す。以て飲食消磨之原醜 (註：消化されること) となるなり。乃ち宜く一箇の臟名を命け以て他臟と併稱すべし。然も漢人未だ説かざる所の者なり。故に今新たに一字を製り訳して膵と曰う。膵は徒孫の切なり。月は肉なり。屯は聚なり、結なり。即ち濾胞屯聚して肉となるの会意なり。(字書を按ずるに膵は鳥藏なり。鳥藏を言うて鷄膵鶴膵と名づく。即ち捩る所有るに似たりといえども然し亦必ずしも然るに非ざるなり。蓋し会意の偶然にして合する者なり)。一名は濾胞牀なり、此の物諸書に異名甚だ多し。

即ち大会濾胞・腹裏膵牀・都嚢 (すべて肉)・会簇濾胞・純膵・素肉の類いなり。皆和蘭称呼の訳名なり。ラテンは別名なし。其の内に蓄藏する所の精液とその主功質性のごときは既に第三篇に詳し、復贅 (註：繰り返す無駄を) せず。蓋し此の物其の体質 (註：実質) は濾胞なり。常にその所在動脈之血を受け、酸稀液を泌別し以て其の内に藏す。また脾に繋がる所之水脈これに通じ、其の分泌する所の微酸稀液を輸し、以て此れを裨く。宜しく脾篇と併せ考うべし。一説に膵の重きは三十又二錢、或いは四十錢。又曰う、其の總管の十二指腸に入る孔は、胃竇之下、四五指横径之處に在りと。○註證曰く、曆元一千六百四十一年 (我が寛永十八年辛巳)、名哲ホフマニユスなる者、雄鷄を解して、始めて膵中の諸管を視る。乃ち諸をヘルシンギウス (人名) なる者に伝ふ。厥の翌歲、其の人亦偶々一屍を解して始めて之を視る。故に或いは之を呼んでヘルシンギウス管と曰う。」

となっている。

まず「パンクレアスは羅なり」であるが、Dicten の原書にもまた Kulmus のそれにも pancreas という単語が記載されており、これは確かにラテン語である。しかし、もとはギリシア語の pagkreas から由来したものでアリストテレスの‘動物誌’に世界ではじめて掲載された用語である。ただしそこには‘いわゆる’という意味の形容詞が冠されており、正式な学術用語ではなかったことを推測せしめる。このことについては後に詳述する。

次に「漢人未だ説かざる所の者故に今新たに一字を製り訳して膵と曰う。膵は徒孫の切にして、月は肉なり、屯は聚なり結なり。すなわち屯聚して肉となるの会意なり。」であるが、切は反切のことで、漢字の音を示すため、他の 2 字の漢字を借りて表す方法のことである。はじめの父字、ここでは徒 (to) の頭字音 t と、母字孫 (son) の韻字 on をあわせて ton と呼ぶといっているのである。筆者はこの名義解に接するまで、膵を何というのか迷っていた。大漢和辞典¹⁾をみると、膵

* Etymological Consideration of the Pancreas

1) 長崎大学 (〒 852-8051 長崎市坂本 1-12-4)

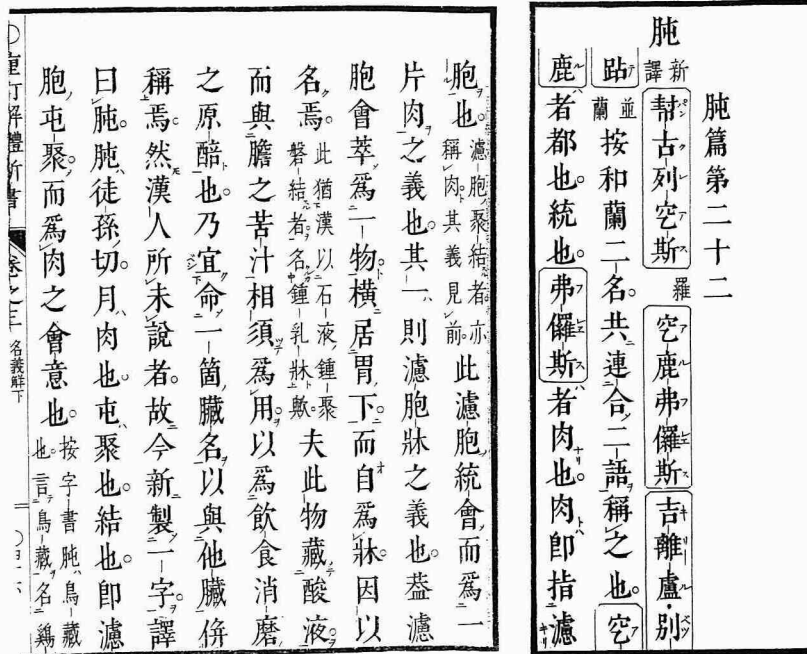


図1 『重訂解體新書 名義解』の臍篇第二十二の①

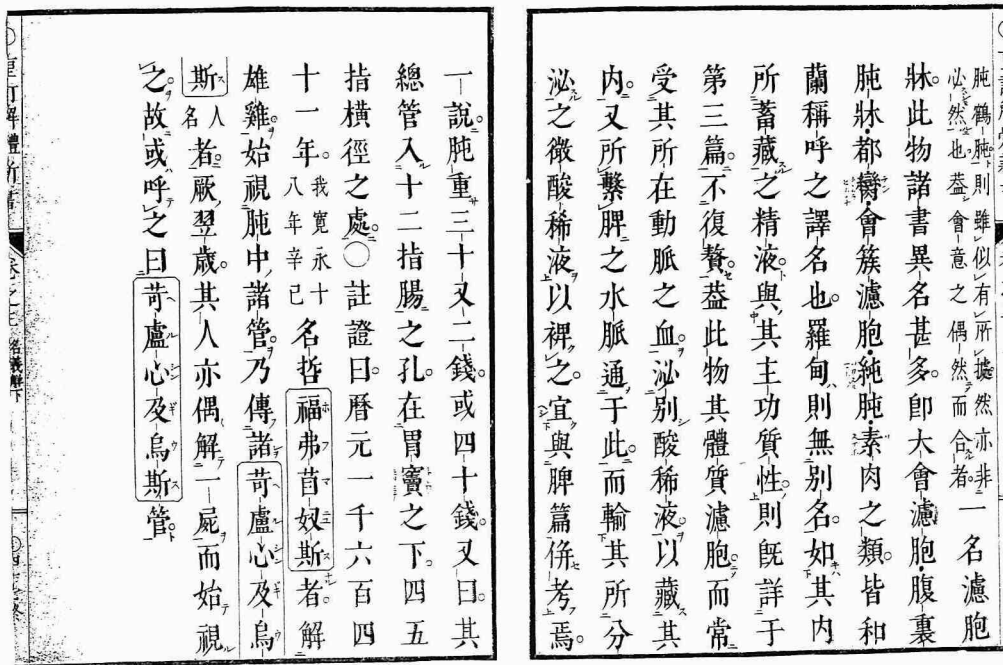


図2 『重訂解體新書 名義解』の臍篇第二十二の②

には実に7通りの読み方がある。慣用的にはジュンと読み、たとえば‘臍臍’を‘ジュンジュン’と読んで、‘懇ろな様’を意味する。その他‘シュン、サイ、スイ、セツ、セチ、トン、ドン’とも読む。名義解には鳥臍すなわち鳥の胃袋の意味にも用いられているとしているが、その時はシュンかサイまたはスイと読むとのことである。しかも臍をトンと読むときは、粉餅あるいは餌の意味になるようである。しかし臍をパンクレアス

の字と提唱した玄沢がトンと呼ぶとしたのであるから、これ以上は立ち入らない。

さて会意とは漢字の作り方、使い方に関する根本的な原則とされる六つの法則、すなわち六書の一つである。六書は象形（目に見える事物を絵画的に描く方法）、指事（抽象的な概念を記号的に表す方法）、仮借（同音の文字を当て字として使う方法）そして会意（意味を表す要素を組み合わせる方法）があり、さらに形

声せい（意味を示す要素〈義符〉と発音を示す要素〈声符〉を組み合わせる方法）と転注（定説がない、形声の特殊な形？）の六つの方法である²⁾。肫を玄沢は会意としたが、肫を ton とよぶとしたのであるから、屯が声符で月が義符の形声字というべきと考える。しかしながら会意とするか形声とするか困難な場合があるようである³⁾。ちなみに肝も膈も形声字である。

次に脾動静脈と分泌との関連に言及しているが、これは今日なお残された問題と思われる。「肫の重きは三十二銭或いは四十銭」とあるが、一銭は一貫の千分の一であり、3.75 g であるので、120 あるいは 150 g ということである。続いてパンクレアス管の十二指腸開口部の位置について述べている。

以上は、Dicten の Aanmerkingen や Kulmus の Anmerkungen にも無い、玄沢自身の見解である。Kulmus も Dicten も、それぞれの注釈（Aanmerkingen, Anmerkungen）は、本文の IV 実質 c) Ductus pancreaticus と V 用益についてののみ追加説明したものである。IVc) は両者とも管の発見や名称の由来について述べ、用語は多少異なるが内容はほぼ同一である。V 用益については分泌液のことであり、これも内容はほぼ同一である。名義解においては○以下の「註證曰く」から Dicten の Aanmerkingen に相当するものと思われるが、次に示すように Dicten の IVc) の注釈のみ訳し、V 用益は訳していない。なお暦元とは西暦のことで、わが国の寛永十八年にあたるが干支は辛巳（しんし、かのとみ）である。名義解には辛巳（しんい）が使われていた。さて IVc) の注釈について Kulmus 書においては「Hofmann が最初にこの Ductus pancreaticus を一羽の七面鳥で発見した。そしてそれを Virsung に教えたところ、彼は翌年人間に於て公開して明らかにした。これからこの管は ductus Virsungianus と呼ばれるようになった」と記載した。しかし Dicten が Kulmus 書を蘭語に訳した時に、「Hofmann」が「Hoffmannus」に、「七面鳥」が「雄鶏」に、「Virsung」が「Virzungius」となり「ductus Virsungianus」が「ductus Virzungianus (Verzungius の管)」に変わったと思われる。

II. Kulmus について

『解体新書』の原書である『Anatomische Tabellen (解剖学表)』の著者 Johann Adam Kulmus 1689-1745 については、前々回の小論文、胆と脾 22 巻 12 号、1134 頁においてドイツ人と記載した。しかし最近報告された論文⁴⁾によると Kulmus が生涯の大半を過ごしたグ

ダンスク Gdansk (旧名ダンチツヒ Danzig) は、1466 年から 1793 年までポーランド自治都市であったのであり、著者石田によれば『ポーランド人名事典』には Kulmus はポーランド人として掲載されているという。

ポーランドには、Kulmus 没後の 18 世紀末にプロシア、ロシアそしてオーストリアの三国によるポーランド分割により 1795 年ついに滅亡、第一次大戦 (1914-1918) 後の独立まで 100 余年の間、外国に支配されたという不幸な歴史がある。しかしながらポーランドにおいてドイツ語は、とりわけダンチツヒは中世以来ハンザ同盟の中心的都市の一つであったから、第二国語として使用されてきたと考えられる。何故 Kulmus が『解剖学表 Anatomische Tabellen』をドイツ語で書いたかの一つの理由であろう。

石田⁴⁾は先に紹介した『ポーランド人名事典』が、1896 年ドイツで刊行された A. Hirsch 篇の『医学者人名事典』よりも Kulmus についてずっと詳細に記載しているとし、それを翻訳しており、また同氏がグダンスクで入手したギムナジウム記録簿の内容も紹介しているので、それらをまとめて引用させて戴き Kulmus の生涯を振り返ってみよう。

クムス・ヤン・アダム Kulmus Jan Adam (ポーランド語読み) は 1689 年 3 月 23 日にヴロツワフ Wroclaw (旧名プレスラウ Breslau) で生まれた。父はパン焼き職人のアダム (Adam)、母はマリア・フレゲル (Maria Flegel)、兄はヤン・イエジイ (Jan Jerzy) である。

まずヴロツワフのギムナジウムに通い、両親を亡くしたあと、1704 年に兄のいるグダンスクに転居し、そのギムナジウムに通った。1711 年にハレ Halle、1714 年にライプチツヒ Leipzig などの各地を訪ねた後、1715 年 5 月にはバーゼル Basel において 'Dissertatio de harmonia morum et morborum (論文: 習慣と病気の協調について) という博士論文を提出し医学博士号を取得した。その後オランダ内を学術旅行しライデン Leiden でヘルマン・プールハーヴェ (Herman Boerhave, 1668-1738) の講義を聴講した。その後グダンスク Gdansk に戻り 1721 年 4 月結婚、翌年 1722 年レオポルドアカデミーの会員となり、そして『Anatomische Tabellen』を出版した。1725 年 5 月にダンチツヒ・ギムナジウム (高等学院) の医学自然学教授に任命され 6 月に就任、最上学年の 8、9 年生に医学と自然学、6、7 年生には自然学を教えた。そしてこの年からベルリン学士院の会員となった。彼は教え子たちの学術論文をまとめて出版したり、主に解剖学の

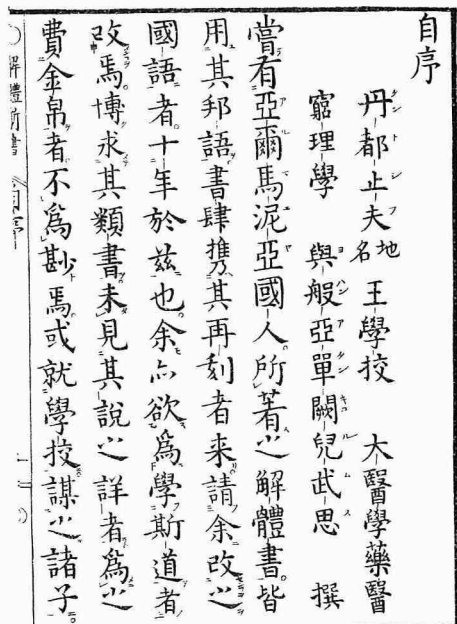


図3 『解体新書』

玄白が訳したKulmusの自序の始めの部分

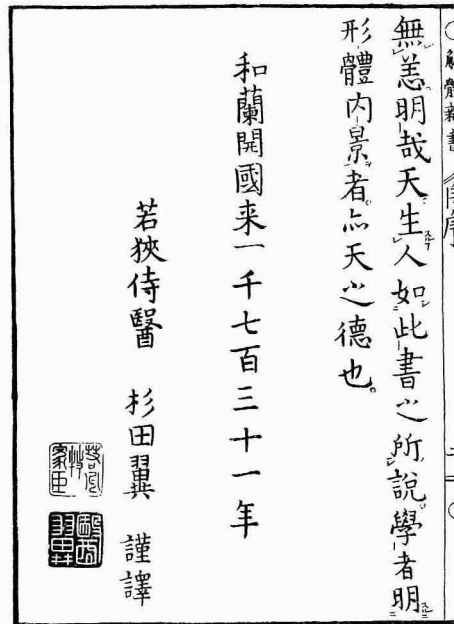


図4 『解体新書』

Kulmusの自序の終わりの部分



Amstelodami Apud Janssonio-Waesbergios, 1731.

図5 Dicten書の扉絵

Dictenが翻訳したKulmus書の扉絵を採用している

ONTLEEDKUNDIGE TAFELN,

Benevens de daar toe behoorende
AFBEELDINGEN
EN
AANMERKINGEN,

Waar in het Zaamenstel des Menschelyken Lichaams,
en het gebruik van alle des zelfs Deelen
afgebeeld en geleerd word.

DOOR

JOHAN ADAM KULMUS,

Doct'or en Hooglectraar der Genees- en Natuurkunde in
de Schoolen te Dantzich, en Mede Lid van de
Keizerlyke Academie der Wetenschappen.

In het Neederduitsch gebracht

DOOR

GERARDUS DICTEN,

Chirurgyn te Leyden.



Te AMSTERDAM,
By de JANSOONS VAN WAESBERG.
MDCCXXXIV.

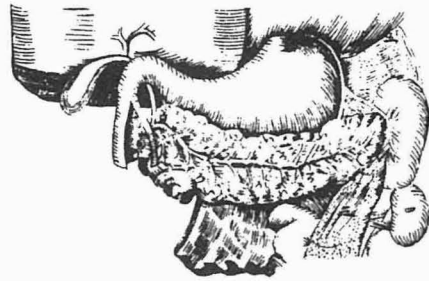
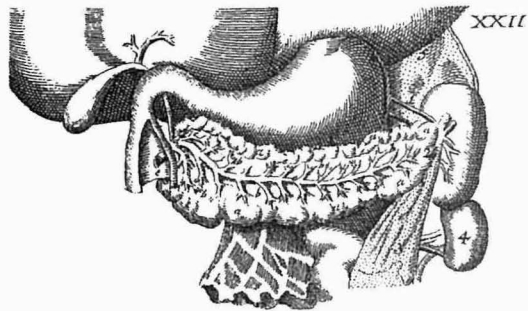
図6 Dicten書の表紙

1734年 Amsterdam 発行。図5と同じ書店と思われる

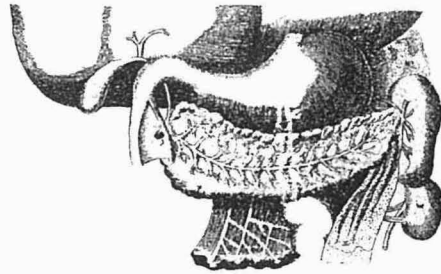
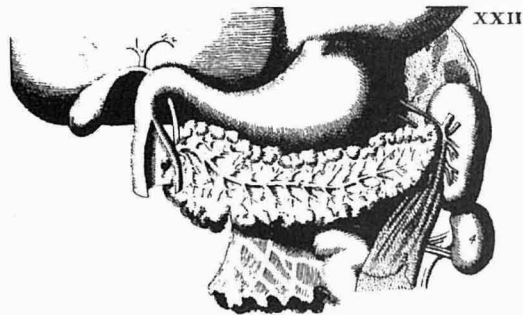
分野で多くの小論文や、また暦に関する書物を著したりした。さらに市囑託物理学学者等の公職の勤めを果たし、1745年5月29日に死去。彼の教授在任期間はちょうど20年であった、というのである。

III. Dictenが翻訳したKulmus原著

『Anatomische Tabellen』執筆・刊行の目的について石田⁴⁾は、この初版をドイツ語で刊行したのは、1722年ダンツヒにおいてであり、彼がギムナジウム教授



示大機里蘭屬諸部與
膽管連十二指腸



膵
接屬諸部與膽管而
其管通于十二指腸

図 7 4面のパンクレアスの図

左上：Kulmus 書 Leipzig 1759 年，右上：解体新書 1774 年

左下：Dicten 書 Amsterdam 1734 年，右下：重訂解体新書 1826 年

に任命される3年前のことであって、このことからギムナジウム学生の教科書として執筆したものではないであろう。しかし18世紀前半当時は、大学医学生、大学卒の内科医の公用語はラテン語であり、内科医のための医学書はすべてラテン語で執筆されていた。同書がドイツ語で刊行されたことは、読者層をドイツ語しか読めない人たち、例えば外科医やギムナジウム学生に限定していたことを示唆している、という。またKulmusが人体解剖をしたかどうかという問題については不明であるが、当時オランダでは、大学の予科的存在であったギムナジウムでは人体解剖は行われていなかったもので、ダンチッヒも同様であった可能性が強いとしている。さらに残された問題として『解体新書』の原著となったDicten書は『Anatomische Tabellen』の何時の版をDictenが翻訳したのかについて触れている。小川が1955年に刊行した『明治前日本医学史第一巻』（日本学士院編）で、「解体新書の本文はKulmusの著したAnatomische Tabellenの第三版（1732）を和蘭の医者Dictenが翻訳したものである…」と述べていることをあげ、石田自身もこれを踏襲してきたとしている。しかし石田は前述の1896年刊行のA. Hirsch編『医学者人名事典』に『Anatomische Tabellen』の刊行の年が記載されているとし、それには「ダンチッ

ヒ1722, 1725, 1728, アムステルダム1733, ライプツヒ1742, 1759, アウグスブルク1745, 1766, ローマ1748…」となっていて、アムステルダムから刊行されたのは1733年であって、1732年にアムステルダム刊行の記載は見当たらなかったという。

さて『解体新書』の凡例の後に杉田玄白の訳したKulmusの自序がある（図3）。これはいうまでもなくKulmusの原著をDictenが蘭訳したものを玄白が翻訳したものである。玄白の訳はほとんど誤訳であったので、酒井⁵⁾が原文どおり訳したが、次のとおりである。

「この解剖図表はすでにまえに二度ドイツ語で出版されたが、このたび書肆の希望により、いっそう鮮明な印刷と精巧な図版とともにやや趣向を変えて再び世に出すことにした。いまから十年まえに私がはじめてこの本を公にしたときの趣旨は、もっぱら私の講義を聴く人々、つまり解剖学を学ぶ初学者のために十分役に立ち、同時に学校での説明があまり冗長にならずにすむことであつた…」

玄白訳のこの自序の最後には図4のごとく、「和蘭開国来一千七百三十一年 若狭侍医杉田翼 [注：玄白の名、號が玄白] 謹譯」とある。これはKulmusが西暦1731年にこの自序を書いたことを示すものであって、

OEUVRES
DE
RUFUS D'ÉPHÈSE,

TEXTE COLLATIONNÉ SUR LES MANUSCRITS.
TRADUIT POUR LA PREMIÈRE FOIS EN FRANÇAIS,
AVEC UNE INTRODUCTION.

PUBLICATION COMMENCÉE
PAR LE D^r CH. DAREMBERG,
CONTINUÉE ET TERMINÉE

PAR CH. ÉMILE RUELLE.
BIBLIOTHÉCAIRE À LA BIBLIOTHÈQUE SAINT-GENEVÈVE.



PARIS.

IMPRIMÉ PAR AUTORISATION DU GOUVERNEMENT
À L'IMPRIMERIE NATIONALE.

M DCCC LXXIX.

図 8 Rufus 全集の表紙

まさか玄白が数字を誤訳したとは考えられない。さらに小川の著書⁶⁾の 55 頁に「玄白たちがその本文を訳したオランダ本の扉」として 56 頁に Kulmus 書に掲載した扉絵を提示している。Dicten 書の扉絵には翻訳の対象とした Kulmus 書の扉絵を採用しているわけで、その下欄には不鮮明ながら「Amstelodami」と「1731」が読み取れる。

いまここに 1734 年発刊の Dicten 書の扉絵のコピー (図 5) を示すが、この扉絵が Kulmus 書のもので 1731 年にできたことが明白である。しかも Dicten 書のタイトルページには図 6 のごとく、1734 年に Kulmus 書と同じ書店が本書を作成したことを物語っている。その書⁶⁾の 78 頁に小川は、Kulmus の「ドイツ語の初版が 1722 年ダンチヒで出て、25 年と 28 年にもダンチヒで、1732 年には第三版がアムステルダム、1741 年には第四版がライプチヒで出た。玄白や良沢らにより日本で初めて訳されたものは右の 1734 年アムステルダムで出版のオランダ語本であった」とはっきり述べている。ついでながら『医学者人名事典』ではライプチヒ出版は 1742 年となっていた。小川はおそらく Dicten が翻訳の対象とした Kulmus 原書の扉絵が 1731 年にできあがっていたことは知っていたにちがいない。小川のいうとおり 1732 年が正しい発刊の年であって、『医学者人名事典』が発刊の年を誤ったのかもしれない。もしも事典が正しいとすれば、Kulmus が自

DU NOM DES PARTIES DU CORPS. 157

^{Cliv. 35.39.}
δὲ αὐτὸ καὶ ἀνοὶ κοιλία· εἶτα ἡ πρώτη τοῦ ἐντέρου ἐκφουσι, πυ-
λωρὸς· εἶτα νῆστις· ἔντερον τροφῆς διὰ παντὸς κενόν, ἀπὸ οὗ καὶ
170 νῆστις ἀνομάσται. Συνεχὲς δὲ τούτῳ τὸ λεπτὸν ἔντερον· ἐκ δὲ τοῦ
λεπτοῦ διχραία ἐκφουσι· καλεῖται δὲ τὸ μὲν τυφλόν, ὅτι ἀλυσθῶς
τυφλὸν ἐστίν· τὸ δὲ κόλον, καὶ κάτω κοιλία, ἢ καὶ νεαίρην Ὀμει- 5
171 ρος καλεῖ. Ἦσσι δὲ ὁ σύνδεσμος τῶν ἐντέρων πᾶς, μεσεντέριον καὶ
μεσάριον· ἀραιὴν δὲ γαστήρα καὶ τὸ σύμπαρ ἔντερον πάλαι ποτὲ
ἀνομάσθην, ἀπὸ οὗ ἐμμεμένικεν οὕτως ἐντι καὶ νῦν τὸ μεσάριον
172 καλεῖν. Ἦσι δὲ τῶν κόλων τὸ ἀπευλισμένον πρὸς τὴν ἔδραν καὶ
173 τὸν ἀρχόν. Τὸ δὲ ἐκπεφυκὸς μὲν ἐκ τοῦ περιφεροῦς τῆς γαστῆρος, 10
καλύπτου δὲ αὐτὴν τε καὶ μέρος τι τοῦ ἄλλου ἐντέρου, ἐπίπλοον.
174 Καὶ ὁ ἀπὸ τῶν φρενῶν περὶ πάντα τὰ ἔντερα χιτῶν τεύχων, πε-
175 ριτόναιον. Ἴ δὲ παρὰ τὴν πρώτην τοῦ ἐντέρου ἐκφουσι κειμένη
176 σὰρξ διαπίμελος καὶ ἀδενώδης, πάγκρεας. — Ἐκ δὲ τῶν δεξιῶν

le gaster; on l'appelle aussi ventre supérieur (estomac); le lieu où l'intestin prend son origine se nomme *partier* (pylore et duodenum); après cela vient l'intestin qui est à jeun (jejunum), ainsi dénommé parce qu'il est 10 jours vide d'aliment. L'intestin grêle lui fait suite; cet intestin a deux prolongements: l'un qu'on appelle *borgne* (caecum) parce que, en réalité, il n'a qu'une ouverture; l'autre qui se nomme *colon* ou *ventre inférieure*, 171 ou, chez Homère (Il. V, 539), *niavé* (bas-ventre). La membrane qui forme le lien commun de tous les intestins est dite *entre-deux des in-* 172 *testins* ou *entre-deux des rates* (méscétes, méscétes); car autrefois, on ap- pelait *ventre rare* tout l'ensemble des intestins; c'est même du souvenir 172 de cette antique appellation que vient notre mot *mesérium*. Au colon survient l'intestin droit (rectum), qui descend vers le siège et le foullement. 173 La *unique flottante* (sphéroon) est celle qui, prenant naissance sur la face an- terieure de l'estomac, recouvre ce viscère, ainsi qu'une partie des autres 174 intestins. Celle qui part du diaphragme et qui s'étend autour de tous les 175 intestins se nomme *membrane tendue tout autour* (péritoine). La chair pleine de graisse et glanduleuse que l'on voit couchée au niveau de l'origine 176 des intestins s'appelle *toute-chair* (pancréas). — A droite de l'estomac

1. κοιλία ἢ πρώτη εἶτα Cl. — 4. δι- l. — 7. ἀρ. δὲ γαστήρα ca cep.; ἀρ. δὲ πρὸς Cl. — 6. καλεῖται τὸ πάλιν. Ἦσσι τὴν γ. l. Cl. — 12. νεφρῶν Cl.

図 9 Rufus 全集 157 頁の 175 項から 176 項にかけて pagkreas のことが述べられている。

序を書き、かつ扉絵ができてから 1 年以上ないし 2 年近くたってやっと発刊されたと思わなければならない。

さて、パンクレアスの語源を探究するうちに、たまたま Kulmus 書、Dicten 書、解体新書、そして重訂解体新書のパンクレアスの 4 面の図を眺めることになった (図 7)。一箇所に集めてみると、驚くほどよく似ていることがわかる。左上が、Kulmus 書、左下が Dicten 書、右上は解体新書、右下は重訂解体新書である。発刊の年や発行所は各書まちまちである。Kulmus は 1759 年『Leipzig』、Dicten は 1734 年『Amsterdam』、『解体新書』が 1774 年、『重訂解体新書』が 1826 年、後の 2 面はもちろんわが国で発刊された。筆者にとっては『重訂解体新書』の図が、もはや模倣を脱した域に到達しているように思われてならない。

IV. “pancreas” の語源について

以上、漢字とはいっても本邦の国字である“膵”とそれに関連する事項について述べてきたが、前述のごとく“膵”は Dicten 書の蘭語 *alvleesch* を翻訳したものであり、pancreas と同義の言葉になるわけである。また Kulmus 書においてみられたように、独語で *Ge-krösedrüse* や *Rücklein* があつたにしても、pancreas という言葉は採用されていたように、その他の国でも

‘pancreas’は共通して用いられてきた言葉であった。これは例えば肝においては人種により、国によりまた地方によって、違った呼び方をしているのとまったく対照的である。すなわち肝はギリシア語でheparであるが、ラテン語ではjecurであり、フランス語ではfoie、ドイツ語ではleberであるといった調子である。

‘pancreas’の語源について、よく引用されるFitzgerald⁷⁾によると、まず「The pancreas was said to have been described first by Herophilus of Chalkidon in about 300 B. C.」とある。この文章の根拠となっている文献はMarx KFH: Herophilus: ein Beitrag zur Geschichte der Medizin. P. 29. Karlsruhe und Baden, D. R. Marx. 1838.である。筆者はこの文献を未だ読んでいないので、批判できないがHerophilusが何と記載したのか、彼はこの臓器を何と呼んだのであろうかという疑問を抱かざるを得ない。筆者が読んだHeinrich von Stadenの労作‘Herophilus: The Art of Medicine in Early Alexandria’⁸⁾によると、Herophilusが現在書き残したと思われるものの中には、パンクレアスについて記載したものは、まったく存在しないということであった。次にFitzgeraldは「and the organ was named in 100 A. D. by Rufus of Ephesus.」とあって、DarembertのRufus全集中‘人体各部の名称について’という論文の中のパンクレアスの部をギリシア語の本文とフランス語訳文を掲載している。筆者もRufusの論文のコピーを手に入れ(図8, 9)『腸の最初の部分に横たわる脂肪性の腺様の臓器 *παγκρεας* (pagkreas)』と記載されており、pagkreasの前には“いわゆる (kaloumenon)”という言葉はないことを確かめた⁹⁾。Fitzgeraldはさらに「Whether Hippocrates regarded the organ as the site of any disease is questionable」としているが、筆者がヒポクラテス全集¹⁰⁾を調べた範囲ではパンクレアスの用語はまったく見出せなかった。

筆者はInternational Journal of Pancreatology 1997に藤澤令夫(Norio Fujisawa)氏と共著で‘On the Etymology of “Pancreas”’と題する論文を発表した¹¹⁾。その要旨を述べると、パンクレアスという用語はAristotleの動物誌に初めてpagkreasの字でみられるが、kaloumenon(いわゆる)という形容詞が付いていること、Herophilusの書き残したもののなかに、パンクレアスに関する記載はまったく存在しないこと、Rufusの‘人体各部の名称について’の論文のなかには、Pagkreasが確かにあって‘いわゆる’という形容詞はもはやないこと、Galenの論文の中に、Herophilusがパンクレアスと思われる臓器について積極的

に研究したという記載があること、したがって解剖学的用語としてpagkreasはおそらくHerophilus以来受け入れられたのであろう、というものであった。

1994年3月任期満了にて退官した筆者は、専門としてきた肝胆膵外科の医学史をまとめ、あわよくば東西医学の融合を試みようという大それた夢を抱くようになった。そしてふと、まず肝や胆や膵という言葉が何時人類は使うようになったのかという疑問に取り付かれた。ここから漢字および印欧文字の語源の探究が始まったのである。肝と胆については別に報告するのでここでは省略する。

さて膵の漢字については、これまでに述べたとおりである。問題はpancreasで、これが何時、誰が初めて用いたのか? である。

『ステッドマン医学大辞典 改訂第2版』メジカルビュー社の前文19頁「医学用語の起源」に、アリストテレス(Aristotle, BC. 384-322)が用いた医学用語としてあげているものの中にpancreasがあるのを発見した¹²⁾。あの有名なギリシャ哲学者が何時何処でpancreasという言葉を使ったのか? その文献はあるのかないのか? 筆者の知る限り、いままで誰も指摘しなかったものでぜひ知りたいと思った。しかしどう調べるか見当もつかず、途方にふてしまったのである。その時ふと思いついたのが三高の同期の藤澤令夫氏であった。彼に電話で相談したところ、すぐ調べて返事してくれた。それはまことに明解なものであった。Pancreasという言葉は確かにアリストテレスが記載したものであって、彼の『動物誌』の中にあることであった。筆者は正に狂喜し深謝した。

やがて頼んであった文献のコピーが届いたがそれとともに、Liddell & Scott: A Greek-English Lexicon, のPagkreasの項のコピーも送られてきた¹³⁾。Pagkreasの項には、Arist. HA 514 b 11, Ruf. Onom. 175, Gal. UP 5.2. とあったのである。Arist. HAはAristotelesの『Historia Animalium』のこと、514は頁数でアリストテレス著作集プロシア王立アカデミー版(通称Bekker版)の頁、bとは右欄(aは左欄)で11は行数である。

Ruf. Onom. とは、Rufus全集中Peri onomasias ton toy anthropoy morion(人体各部の名称について)のことで、その175項を意味する。Gal. UP 5.2. とはGalenのDe Us Partium(人体各部の有用性について)という論文の第5篇第2章のことである。

以上は藤澤氏より教わった。したがってこの希英大辞典を使い慣れている人にとっては、ギリシア語の語源について調べるのは、いとも簡単であったのである。

ものである。この言葉がヒトの臓器を含めてアリストテレスが記載したのかどうか、‘いわゆる’の意味にヒトを意識して述べているのか？ というのが問題である。というのはアリストテレスは動物の解剖はしたが、ヒトの解剖はしなかったといわれているからであり、もしも彼や動物誌の記載においてヒトの解剖を意識した記述があるとすれば、その知識は何時どのようにして得たのであろうかなど、いろいろと疑問点が湧き上がるが、次の5点の検討が必要でないと思われる。

①パankレアスの言葉が出てくるのは、『動物誌』第3巻第4章の1箇所である。それ以外の『動物誌』の記述のなかで、ヒトの解剖との関係を示唆する記載があるのかなのか？

②『動物誌』が書かれた時期は何時か？

③アリストテレス以前にギリシアにおいて人体解剖は行われたのか？

④アリストテレスに引き続きアレクサンドリアでヘロフィルスが擡頭し人体解剖が盛んに行われ、彼は後世から解剖の父と称えられた人であった。彼の業績が『動物誌』へ影響したということはなかったのか？

⑤アリストテレスあるいはヘロフィルスの後継者が『動物誌』を改訂するようなことはなかったのか？

これらはいずれも解答を得るにはきわめて困難な問題に思われるが、どこまで解明できるか試みてみたい。

参考文献

- 1) 諸橋轍次：大漢和辞典，巻九，262，大修館書店，1988.
- 2) 阿辻哲次：漢字の字源，第2刷，232-233，講談社，1994.
- 3) 白川 静：字統，3-6，平凡社，1984.

- 4) 石田純郎：『解体新書』の原著者クルムスについての研究. 日本医史学雑誌 48：31-51，2002.
- 5) 酒井しづ：新装版解体新書，第2刷，40-41，講談社，1999.
- 6) 小川鼎三：解体新書 蘭学をおこした人々，55-56，78，中央公論社，1968.
- 7) Fitzgerald PJ：Medical anecdotes concerning some diseases of the pancreas. The pancreas, (Fitzgerald PJ, Morrison AB), 1-29, Williams and Wilkins, Baltimore, 1980.
- 8) Staden H von：Herophilus, The Art of Medicine in Early Alexandria, 153-209, Cambridge, 1989.
- 9) Rufus：Oeuvres Texte Collationné sur les Manuscrits Traduit pour la Première Fois en Français. Publication Commencée par Ch Daremberg, continuée et terminée par Ch Emile Ruelle. 157, L'imprimerie Nationale, Paris, 1879.
- 10) Hippocrates：HIPPOCRATES, Loeb Classical Library, Vol. I -VIII, Harvard University Press, 1995.
- 11) Tsuchiya R, Fujisawa N：On the etymology of "pancreas". International Journal of pancreatology 21：269-272, 1995.
- 12) 吉 利和 監修：医学用語の語源. ステッドマン医学大辞典，19-23，メジカルビュー社，1985.
- 13) Liddell HG, Scott R：A Greek-English Lexicon, Vol. II, 1284, 1951.
- 14) Aristotle：Aristotelis Opera revised by Bekker, 514, 1831.
- 15) 島崎三郎 訳：アリストテレス動物誌(上)，117，岩波書店，1998.
- 16) Peck AL：Aristotle IX, History of Animals Book I -III. 181, Loeb Classical Library, 1993.
- 17) 緒方富雄：語原ギリシア語法，11-25，医歯薬出版株式会社，1982.

* * *